西洋建築事始め
―棟梁たちの擬洋風建築　Ⅲ―

山村　賢治（建築史学会）

5. 下見板系擬洋風の出現

擬洋風は漆喰系をピークとするが、しかしそこで終ったわけではない。各地に残る擬洋風の中には、木骨石造系とも漆喰系ともちがうもう一つの系統が混じっている。山形県の済生館（M12）、西田川郡役所（M13高橋兼吉）、茨城県の水海道学校（M14羽田甚蔵）、隠岐の島の隠岐郷土館（旧周吉外三郡役所）（M18）、山口県の萩学校教員室（M20）など、形の奇妙さは明らかに擬洋風で　ありながら、漆喰の代わりに下見板を張ってペンキで仕上げている。しかし北海道の下見板コロニアルのようにアメリカンではない。これを“下見板系擬洋風”と呼ぶ。木骨石造系、漆喰系に続く第三の擬洋風の登場で、これをもって明治の擬洋風の打ち止めとする。時期的には先行の漆喰系が開智学校（M9）によってピークを迎えた頃に始まり、明治10年代初頭には早くも頂点に達し、10年代を通して漆喰系にとって代わるが、20年代に入ると力のある作は生れなくなり、わずかに島根の興雲閣（M35）のような建物を地方に残しながら立ち消えていく。木骨石造系を初期、漆喰系を盛期とするなら、下見板系は晩期の擬洋風といえよう。

＜山形の西洋館＞

擬洋風の掉尾を飾るこのスタイルは、東京と山形の二カ所で明治5年（工部省庁舎）と9年（朝暘（ちょうよう）学校）に現われる。時期はやや遅れるが山形の方が質、量ともはるかに充実しており、本格的な下見板系擬洋風のスタートは明治9年の山形県であったといえる。山形（当時酒田県）の鶴岡にできた朝暘学校は、擬洋風小学校としては藤村式や開智学校に一歩遅れたが、大きさは長さ65m、一部3階、部屋数42室、席数1926席と、日本最大の規模を誇った。以後山形県では下見板系擬洋風の建設が組織的に推進され、県庁舎（M10）をはじめ師範学校（M11）、済生館（M12）と大作三つが相次ぎ、さらに郡部にも広がり、今も残る西田川郡役所（M14）、鶴岡警察署（M17）などが生まれる。建設ラッシュは明治9年から14年まで5年間続き、作られた建物は主なものだけでも28件におよぶ。こうした山形の下見板系擬洋風のピークを飾ったのが県立病院の済生館であった。特殊な形態をしており、平面は16角形のドーナツ型で、その前面に4層の塔が建つ。

旧済生館（山形市）

＜山形と三島通庸＞

三島通庸（みちつね）は薩摩藩出身の維新の志士で、明治維新直後は都城の地頭として地方自治の実績を積んだあと、中央に上って東京府の参事（副知事）を勤めていたが、明治7年内務卿大久保利通の命で県令として山形（当時酒田県）へ送り込まれた。維新後新時代の変動に立ち遅れ反政府の空気が漂う東北地方の改革のため、三島の地方自治の腕が買われたものであろう。　酒田に来た三島は、庄内地方で起っていた一揆を鎮圧して大久保の期待に応える一方、酒田県を鶴岡県と改称し県庁

を鶴岡に移した。その頃旧鶴岡城の土手と石垣を崩して濠を埋め、その上に下見板張りの朝暘学校を建てたのである。完成と同時期に鶴岡県は廃され、他の２県と合わせて山形県となり、三島は鶴岡から山形へ本拠を移して新しい場で存分に腕を振るうこととなる。山梨の藤村式において藤村紫朗が、信州の学校建設において永山盛輝が果した役割を、山形では三島が果したのである。

山形県の経済振興のため、三島はまず交通体系の整備を図り、周囲の県をつなぐ新しい道路を開いた。中でも山形市から米沢を経て奥羽山脈をトンネルで抜けて福島に至る新道は、明治の土木史を飾る大工事として名高い。道路整備の一方、新しい産業の育成につとめ、農業試験場、農機具の改良、西洋式の畜産、西洋野菜の栽培などを試み、また勧業製糸所と水車動力による機械織工場の設置も行なっている。文明開化政策は、鶴岡での朝暘学校のような学校、病院、県庁、郡役所、警察などの新しい機能の建物を洋風建築で作ることを通して行われている。

旧鶴岡警察署（鶴岡市）

三島がただの地方県令にとどまらなかったのは、殖産興業、文明開化、政治安定の三項目を、つまり経済、文化、政治の三つを、具体的な都市の形にまとめ上げたことである。
それが県庁前の都市計画にほかならない。三島は町の中心から離れたところに通した南北大通りの正面突き当たりに南面して県庁を置き、大通りの両側に政治、経済、文化の三機能を集中して配置した。建物はすべて下見板にペンキを塗った純白の西洋館であり、明治新政権の意志を都市の形にすればこうなったであろうというこの光景は、高橋由一の筆によって描かれ、「山形市街図」として残されている。

山形市街図（高橋由一画）

これだけの成果を残している山形の下見板系擬洋風だが、肝心の設計者が明らかではないというのが疑問である。北海道のアメリカ直伝の下見板コロニアルも代表作についてはたいてい設計者が記録に残っているのに、山形の擬洋風系は第一作の朝暘学校をはじめ、県庁、済生館、師範学校いずれの記念碑的大作も誰がデザインしたか分らない。西田川郡役所や鶴岡警察署などの県直営ではない建物については、設計と施工を手掛けた棟梁の名が残されているのに、三島が力を傾けた工事に限ってデザイナーの名前は知られていない。三島の下で建築関係の仕事をしていた薩摩出身の原口裕之という技術者がいたことは知られているが、おそらく建築好きの三島が大まかなデザインを考え、原口が図面化して、それをさらに工事担当の棟梁たちと協議しながら進めたのではないか、という推測は成り立つと思われる。というのは、山形での第一作朝暘学校の図面は巻物に仕立てられて三島家に伝えられているし、後の警

視総監時代には殉職警官を祀る「弥生社」の設計をみずから手掛けたことがわかっているからである。

旧西田川郡役所（鶴岡市）

擬洋風の建築と都市を残して、三島通庸の山形時代は明治 15 年に終る。引続いて隣の福島県令となり、「会津三方道路」の名で知られる交通体系の整備に取組むが、県費支出と労務提供のことで福島自由党と対決して「福島事件」が起き、さらに 16 年に栃木県令を兼任となるが、三島に潰された福島自由党の残党による三島暗殺計画で知られる「加波山事件」が起きている。福島、栃木両県時代の三島は、自由民権運動への弾圧によって「鬼県令」と呼ばれたが，それでも「土木県令」であることは変わらず、道路だけでなく下見板の擬洋風を作りつづけた。福島県では現存する伊達郡役所（M16）と南会津郡役所（M18）などがある。栃木県では県庁が山形県と同一形で作られ、その前の大通りも同じような構えとなっている。山形、福島、そして栃木、三島通庸の歩いた後には、政治史上には事件が残り、建築史上には下見板の擬洋風が残った。

＜全国への流布＞

山形に先んじて東京では、明治 7 年に下見板系擬洋風第一号の工部省が完成しているが、しばらく間を置いた明治 10 年になって、学習院（M10）が下見板張りに望楼を載せ、唐破風付の車寄せをつけた印象深い姿を見せ、同時に

旧伊達郡役所（福島県桑折町）

駒場農学校（M10）、一橋講堂（M10）が登場し、さらに元老院（M11）が現われる。いずれも設計を手掛けたのは大蔵省営繕寮の後身である工部省営繕課だから、それまで林忠恕の主導の下、木骨石造系の擬洋風をもっぱら作ってきた中央官庁の技術陣は、明治10年代に入ると下見板系へと一気に転じたわけである。　東北と東京であいついで芽吹いた下見板系擬洋風は、明治10年代を通じて東北3県と東京に根を下ろした後、20年代に入って一気に日本列島全域に広まったものと思われる。しかし30年代に入ると擬洋風らしい面白いデザインのものは次第に消え、ただ下見板張りの四角い箱に窓を開けて車寄せを突き出しただけの姿に変わっていく。現在も各地に残っている下見板の西洋館で、明治の写真館、大正の医院がペンキ塗りの姿を見せているのは、下見板系擬洋風の何代目かの末裔なのである。

島根県内に残る事例としては、前記隠岐郷土館、興雲閣の代表的2例のほかに、松江市玉湯町の湯町公民館（M36）、出雲市の東洋写真館（T7）、時代はやや下って邑智町羽須美の旧口羽郵便局（S12）、安来市広瀬町布部の布部郵便局（S14）などがある。

イギリスの片田舎に始まった下見板は、大西洋を渡り、アメリカ大陸を横断しながらアメリカ建築を生み、さらに太平洋を渡って北海道や横浜に上陸し、山形へ東京へと伝わって擬洋風を

成立させ、そして日本列島のすみずみまでしみこんでいったのである。

隠岐郷土館（隠岐の島町）

旧周吉外三郡役所として明治18年建設。隠岐支庁として使われたが新庁舎新築により、昭和45年現在地（水若酢神社内）に移築された。

下見張り板の外壁、入母屋破風付玄関、正面2階中央のバルコニーなど明治初期の擬洋風建築の特色を持つ。（県指定文化財）

興雲閣(松江市)

大正天皇が皇太子時代の山陰行啓の行在所として松江城二の丸跡に建設された。1、2階の吹き放ちの列柱廊下、入母屋妻入りの正面玄関部など、西洋建築とはいえないかもしれないが、伝統的な日本建築から見れば立派な洋館である。日本建築の細部意匠に創意工夫を加えた擬洋風建築の典型かつ秀作と言える。地元大工和泉利三郎の設計である。

湯町公民館（松江市玉湯町）

明治36年松江農林学校本館として建設され、昭和14年新校舎建設により保管が決まり、JR玉湯温泉駅近くに移設された。

東洋写真館（出雲市）

大正博覧会（T7）でパビリオンの一つ小西六写真工業の建物を模してつくられた。スタジオの吹き抜けにガラスの大屋根、アーチ型の窓マグサなど洋風装飾を持つ。

＜参考文献＞

日本近代建築の歴史　村松貞次郎著　（岩波現代文庫）

日本の近代建築　上　下　　藤森照信著　（岩波新書）

日本近代建築大全　米山　勇　　伊藤隆之　（講談社）

日本の建築　　8　　日本建築学会編　（新建築社）

島根県の近代化遺産　　島根県教育庁文化財課編

しまねの家－住まいと町なみ－(社)島根県建築士会編